

## 1 多様なアプローチ（きっかけづくり）による里地里山の再評価と協働による取組の進展

### ⑧地域特性を端的に表現するキーワードが重要性の理解を促進した例

#### 兵庫：「日本一の里山」の認識

本モデル事業懇談会の専門家である服部保先生（兵庫県立人と自然の博物館）の研究から、地域特性を端的に表現するキーワード「日本一の里山」が提案され、このキャッチフレーズが住民意識を替えるきっかけとなった。

本モデル事業地の東側に位置する川西市のクヌギ林は以下のような際立った特性を備えている。

- ・茶道用の良質で高価な炭として全国でも有名は「菊炭（池田炭、一庫炭とも呼ばれる）」の原料として、同地域のクヌギは現在でも高い商品価値を有しており、かつクヌギ林を現在でもモザイク状に管理しながら菊炭を生産するという伝統が生きている。
- ・そのために同地域では現在でも10年程度の伐期でクヌギの皆伐が行われており、その後の手入れも含めた「生業としてのかつての薪炭林管理」が維持されている。
- ・この土地でのクヌギの伐採は人の丈ほどもある高さで伐採をし、萌芽林をくり返し利用することで生育した「台場クヌギ」が各地に存在する。炭生産のための皆伐により、明るい林床や台場クヌギなどが維持され、夏緑植物や昆虫などの高い多様性が今でも維持されている。



全国を見渡してもこのような地域は他にほとんど見られない。この「日本で唯一の生きた里山」を「日本一の里山」と称することで、住民の意識や地元産業の見直しが始まった。

NPOなどの活動の契機となっただけでなく、地元の産業界（能勢電鉄）、ダム管理事務所などでも日本一の里山を維持しよう、復活させようという気運が高まってきた。「日本一の里山」をアピールしようと、平成17年にはシンポジウム「語るうかい。里山よ、元気をだしてくれ」が行われた。



同年、独立行政法人水資源機構一庫ダム管理事務所の協力で敷地内にクヌギを植える「クヌギを植えて里山を作ろう大作戦」が毎年展開されるようになった。さらに地元黒川地域が中心となって「黒川里山まつり」が平成18年に開催され、大盛況となった。

以上は、ひとつのキーワードである「日本一の里山」によって、住民の意識向上や保全再生活動が促進された優良事例と考えられる。